

## ヨシエビ種苗生産とPAV対策について

ヨシエビは岡山を代表するエビの一種です(写真1)。県内では「すくもえび」、「しらすえび」または「おおぞうえび」など、地域によって異なる名前と呼ばれています。成長すると16cm近くになり、価格もクルマエビに次ぐ高値で取引されています。沿岸性が強く、水深10~20mの砂泥域や泥域に生息し、小型定置網や小型底びき網漁業によって漁獲されています。

水産研究所では、平成23年度からヨシエビ種苗生産を再開し、現在に至っています(表1)。6月下旬に日生町漁協からメスの親エビを購入し、その日の夜に水槽内で産卵させます。1尾のエビが20~30万粒の卵を産みます。卵からふ化した幼生(写真2)に、成長段階に合わせて植物プランクトン、アルテミア卵および配合餌料を与え、8月中旬まで飼育します。29年度には約670万尾の稚エビを生産しました。



写真1 ヨシエビ (全長15cm)



写真2 ふ化直後のエビ幼生  
(ノープリウス幼生、0.25mm)

しかし、このヨシエビ種苗生産には、PAV(クルマエビ類の急性ウイルス血症)発症の危険性が常に付きまといまいます。PAVは平成5年に国内で初めて発生し、へい死率は多くの場合80%以上に達するため、計画的な種苗生産事業の妨げとなっています。本県でも23~26年度の間3回PAVが発症し、放流サイズまで育てた稚エビの殺処分を余儀なくされました。

このような状況を改善するため、PAVの検査方法を変更しました。これまでは親エビの検査部位に「血リンパ」を用いていましたが、PAVの検出率が劣っていたため、27年度から検出率の向上が見込まれる「受精囊」に変更しました。検査でPAV陽性が確認されたエビの卵は殺菌して廃棄し、陰性が確認された卵のみを種苗生産に用いました。その結果、27年度以降、3年連続でPAVの発症を防ぐことができました。

今後も、PAVを含む様々な疾病の発症を防ぐため、検査手法や飼育方法の更なる改善や工夫を施し、より安定した種苗生産の確立に努めてまいります。(資源増殖室：小見山)

表1 ヨシエビ種苗生産実績とPAV発症状況

年 度	23	24	25	26	27	28	29
生産尾数(万尾)	752	736	596	842	522	915	670
PAV検査部位	血リンパ			受精囊			
PAVの発症	発症	-	発症	発症	-	-	-